

2024年度（令和6年度）学校評価自己評価表

松永中学校区	校番 14	福山市立松永中学校
最終更新日		2025年（令和7年）2月20日

I 福山市	ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。 ビジョン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。
-------	--

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容	児童生徒の現状	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)	【知識・技能】【思考力・判断力・表現力】【主体的に学ぶ力】【自己形成力】
・評価はすべての学校で「十分満足できる」「おおむね満足できる」と評価された。 ・評価指標は短期では評価しにくい。評価項目の検討が必要。 ・学校情報の外部への発信は実態がよくわからず評価しにくい。 ・関係者評価制度の見直しを希望する。	・全国学力調査では、全国平均を下回っているが前年度より向上してきている。低学力の子どもが多く、学力定着に課題がある。 ・同調査の「意識調査」ではほとんどの項目で全国平均を上回っている。 ・挨拶ができる子どもが増えてきた。校区で取組んだ成果が見えてきた。	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)	・確かな学力を身につけ、自ら進路を切り開く子ども ・自己肯定感が高く、社会に貢献できる子ども
		中学校区として統一した取組等	・「主体的な学び」の授業づくりに取組み、学力の向上を図る。 ・「自己表現」「あいさつ」に取組み、自己肯定感の向上を図る。 ・「自分で選び・決める活動」に取組み、自己形成力の向上を図る。

Ⅲ 自 校

ミッション	育成する力 (21世紀型 “スキル&倫理観”)	【知識・技能】【思考力・判断力・表現力】【主体的に学ぶ力】【自己形成力】
地域社会で活躍し、その発展に寄与することができる知・徳・体の調和のとれた生徒を育成する。	めざす 子ども像	・自ら考え学ぶ意欲的な生徒 ・主体的に活動し、自ら成長する生徒 ・豊かな心を持ち、地域から応援される生徒
学校教育目標		
主体性と自己肯定感を育み、社会で通用する生徒の育成		
現 状	研究	「自ら考え学び表現できる授業」の創造 ～ 学力向上に向けた主体的な授業 ～
＜児童生徒＞ ○生徒会を主体としたあいさつ運動を展開することで、あいさつに対する意識と共に行動が向上している。 ○生徒が主体となり生徒指導規程の改定や行事の企画を行うなど、主体性が身についている。 ●不登校の生徒が増加傾向にある。(スマートフォン、ゲーム)	主内容等	国語・社会・数学・理科・英語
＜授業＞ ○日常生活や他教科との関連を意識しながら授業改善を進めた結果、学んだことを他の教科・学習に生かせると感じている生徒が多く見られた。 ○調べたことや自分の知識経験と結びつけながら書いたりまとめたりする活動を取り入れたことで、全国学力定着状況調査の「書くこと」正答率に学力向上の伸びが見られた。 ●「知識・技能」に課題がある生徒が多く、授業の中で ICT を効果的に活用しながら基礎学力の向上を図る必要がある。 ●日常の生活経験が乏しく、学習とのつながりが弱い。	めざす授業の姿	【知識・技能】 学習内容を文章で語彙力豊かにまとめることができる 【思考力・判断力・表現力】 生徒が自己表現活動を通して課題解決を行おうとする 【主体的に学ぶ力】 興味・関心・意欲を持って課題を見つけるとともに、学習内容が日常生活に結びつけられる 【自己形成力】 自己評価・他者評価を通して、生徒自身が学習内容の定着が確認できる

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	力 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
3	自ら考え学ぶ 授業づくりを 進めて、学力 を向上させる。	★	継 続	・効果的な ICT 活 用や自己表現を取 り入れた授業を展 開し、学力の向上を 目指す。	・生徒が主体的に思 いや考えを伝える 自己表現活動を取 り入れた授業を構 築する。 ・各教科の授業にお いて、タブレットや デジタル教材を活 用し、基礎学力を向 上させる。	・アンケート調査 ①「授業で自分の思 いや考えを表現で きたか」②「学び合 いの授業でわかっ たと実感できた場 面があったか」肯定 的評価90%以上 ・アンケート調査 「タブレットを使 った授業で学習が 深まった」肯定的評 価90%以上	・各授業者が自 己表現活動を取り 入れた授業を 意識的に行って きたため、 ①90.5% ②96.6%であっ た。 ・授業者がタブ レットを通して 思いや考えを交 流し、お互いに成 長していける授 業を意識的行っ てきたため 96.2%だった。	3	3	・引き続き自己表 現活動を各教科等 における授業で意 識的に取り入れ、 授業の相互参観な どを通して自己表 現活動の質を高め ていく。 ・複数教員の相互 参観授業を行い、 I C Tの効果的な 活用について教員 が交流していくこ とでさらに効果的 な授業内容を目指 す。	・全職員が授業研 究を繰り返し行い、 表現力を高める授 業を構築してきた。 ①88.9% ②95.7% ・複数教員の相互 参観授業を行い、 表現力を高める授 業における効果的 な I C Tの活用方 法を模索した。「タ ブレットを使った 授業で学習が深ま った」97.0%	3	3	3	・さらに生徒の 基礎学力、表現 力の向上を目指 し、相互参観授 業に取り組んで いく。 ・朝学習におけ るタブレットの 活用など基礎学 力を高めるため の効果的な I C T 活用に取り組 んでいく。
3	児童・生徒の 自己肯定感を 高める。	★	継 続	・生徒が主体的に活 躍する場面を様々 な教育活動で設定 し、自信を持たせ、 自己肯定感を高め ていく。 ・自ら率先して「社 会で通用する」あい さつができるよう になる生徒を育て る。	・生徒が主体となっ た日々の学習、学校 行事を仕組み、生徒 に「できた・やれた」 という達成感を積 ませる。 ・生徒会や部活動を 主体として、あいさ つのレベルを高め る取組を進めてい く。	・生徒アンケート調 査「学級・学校に 対する満足度」を 90%以上にす る。 ・生徒アンケート調 査「自ら進んであ いさつができる」 を90%以上にす る。	・体育大会や文 化祭などの行事 を生徒主体で行 ったが、指標を達 成することがで きなかった。 【87.3%】 ・授業始めのあい さつなどの取 組を行ったが、指 標を達成するこ とができなかつ た。【88.1%】	3	3	・生徒一人ひと りに真摯に向き合 い、教育相談週間 を充実させ、学級 への帰属意識を高 める。 ・朝のあいさつ運 動を生徒会だけで はなく、学級や学 校全体のあいさつ 運動にしてい く。	生徒アンケート調 査「学級・学校に 対する満 足 度」 93.4% 生徒アンケート調 査「自ら進んであ いさつができる」 90.8%	3	3	3	・生徒が主役と なる授業や行事 をさらに充実さ せ、松永中学校へ の帰属意識を高 める。 ・生徒会が啓発 活動を行うのは もちろんのこと、 教師があいさつ のトッピメー ジを醸成できる ようにする。
3	教職員の資 質・能力の向 上を図る。		継 続	・日々の仕事の中で 生徒と学習面で向き 合うことが実感でき るようにする。	・平日1回、休日 1回の部活休養 日を徹底するた めに、土日の部活 動計画を前月迄 の承認制とする。	・「子どもが自ら学 ぶ」授業づくりにあ てる時間がある教職 員70%以上 ・全員が、平日1回、 土日1回の部活時間 内とし、時間外勤務時 間が月45時間以内 とする。	・教育研究部を中 心に教材研究等を 進める組織づくり が出来た。73.3% (市平均 10 ポイ ント以上上回る) ・土日祝日の部活 動の実施率は34% で、時間外勤務45 時間以内の達成率 は34%。	3	3	・校務補助員等を活 用して、10～11月 末中に授業者全員が 研究授業を行う時間 を生み出す。 ・中体連の大会は前 半で終了しておりカ ップ戦等の大会出場 は目的を絞り込み精 査する。	・授業者全員が研 究授業を行うこと が出来た。62.5% ・土日祝日の部活 動の実施率は 37%、45時間以 内の達成率は 38%で4ポイン トアップ。	3	3	3	・全員が授業改善 に取組む土壌がで きつつあり、基礎学 力をアップする授 業改善につながる 朝学習を準備する。 ・校務補助員等へ の業務依頼書の更 なる工夫をし授業 づくりにあてる時 間を生み出す。

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。